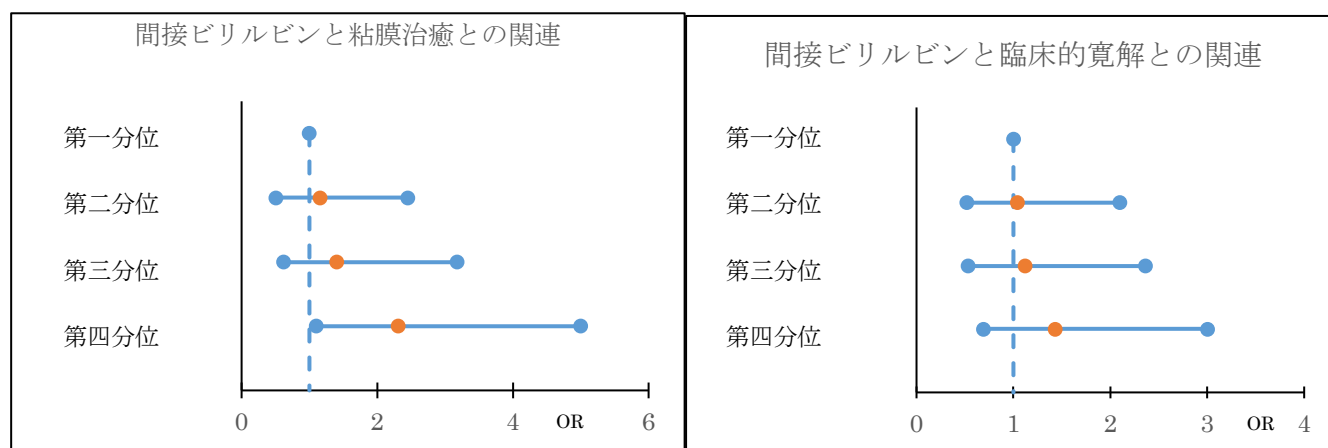


## 潰瘍性大腸炎患者における血清ビリルビン値と粘膜治癒との関連性

【背景】潰瘍性大腸炎の患者数は世界的に増加傾向であり、日本でも増加の一途にあります。近年様々な治療薬が潰瘍性大腸炎の治療に選択できるようになっており、臨床的寛解のみならず内視鏡的寛解（粘膜治癒）が治療目標となります。しかし、頻回の内視鏡検査は患者の負担となるため、粘膜治癒の指標となる簡便で非侵襲的なバイオマーカーが検索されています。従来よりビリルビンの抗酸化作用、抗炎症作用が提唱されており、潰瘍性大腸炎の発症リスクや活動性の指標と血清ビリルビンとの相関は報告されていますが、内視鏡的粘膜治癒と血清ビリルビン値との直接的な関連は報告されていませんでした。今回我々は、潰瘍性大腸炎の粘膜治癒を予測する非侵襲的マーカーとしての血清ビリルビンの有用性について愛媛 UC フォローアップ研究のデータを用いて解析を行いました。

【方法】愛媛 UC フォローアップ研究登録時にデータの欠損が無かった潰瘍性大腸炎患者 304 例を対象としました。内視鏡的粘膜治癒は Mayo endoscopic subscore 0 と定義し、内視鏡的粘膜治癒、臨床的寛解と血清ビリルビン値について検討しました。総ビリルビン、間接ビリルビンをそれぞれ 4 分位し、最も低いところを reference として、粘膜治癒との関連についてロジスティック解析を行いました。交絡因子として年齢、性別、プレドニゾロン使用、抗 TNF- $\alpha$  抗体製剤使用、病変範囲、血清 CRP 値を補正しました。

【結果】間接ビリルビンにおいて、臨床的寛解との関連はみられませんでした。内視鏡的粘膜治癒とは最も高値の第 4 四分位群で有意な正の相関がみられました。[補正後オッズ比：2.31（95%信頼区間 1.10-5.00、p for trend=0.026）]



【結論】潰瘍性大腸炎患者において血清中の直接ビリルビンと間接ビリルビンは内視鏡的粘膜治癒と有意に正の相関がみられ、非侵襲的マーカーとして有用である可能性が示唆されました。